

あとほりいせき

跡堀遺跡

(海老名市No.82遺跡)

調査期間 20071101～20081226

所在地 海老名市門沢橋・中野

時代
弥生
古墳
古代
中世
近世



概要

今回の調査は2004年から2006年まで調査を実施し、既に「跡堀遺跡Ⅰ」として報告書が刊行されている遺跡の第2次調査です。

今回の調査も中日本高速道路(株)による第二東名高速道路建設に伴う調査として、2007年11月から2008年12月まで実施しました。その後出土品整理作業を2009年1月から開始し、2010年3月までの予定で実施中です。

遺跡はJR相模線門沢橋駅の北西約600mの相模川によって形成された自然堤防上に存在しています。遺跡付近の標高は概ね14m程です。

今回の調査では、中世の遺構・遺物がわずかしか発見されなかった、ということが特徴としてあげられます。前回の調査では調査範囲の東側を中心に、多くの遺構・遺物が発見されました。しかし、今回の調査では溝状遺構・土坑・ピットがそれぞれ数基ずつと、わずかな遺物の出土にとどまりました。今回発見された大型の107号溝状遺構は、中世の土地利用の境に掘られている堀のような性格を持つ可能性があり、今回はこの溝の西側を主な調査範囲にしています。このために、主に調査範囲の東側に分布する、中世の遺構・遺物が今回の調査ではあまり発見されなかった、ということがわかってきました。

居住に関する遺構では今回は古墳時代前期である4世紀、古墳時代後期である6世紀、それに10世紀以降の平安時代末期の竪穴住居址が発見されました。特に10世紀後半以降の遺構・遺物の発見例は神奈川ではあまり多くないので、古代から中世への過渡期を考えるための貴重な例であるといえます。平安時代の出土遺物の中には、灰釉陶器や緑釉陶器など現在の東海地方から近畿地方で焼かれたものも出土しています。これらの竪穴住居址は、年代に関係なくすべて同じ調査区から発見されました。この調査区は水はけが大変良く、大雨のあとで隣接した調査区が水没しているような状況でも水が溜まることはありませんでした。当時



▲107号溝



▲1号河道



▲ 第5号竪穴住居址(平安時代)

の人々がこのような土地の特徴を把握して、居住地を定めていたことがよくわかる事例です。

近世以降は1次調査と同じように、多くの遺構・遺物が発見されました。1次調査と同様に居住に関すると思われる遺構は発見されませんでした。やはり、耕作地などに利用されていた場所であると考えられます。この時期の遺物は江戸時代中頃から明治時代に及ぶものが出土しています。中でも18世紀から19世紀にかけての江戸時代中期から後期にかけてのものが中心となっています。

1次調査の成果と今回の出土品整理作業を通じて、この遺跡の各時代における土地利用の状況が徐々に明らかになってきました。近世では主に耕作地として利用されていた可能性が高く、居住に関する遺構の発見はありませんでした。中世は1次調査の調査範囲の中の北東部を中心に、建物群やその付帯施設が発見されましたが、前述のとおり107号溝状遺構が土地利用の境となっていた可能性があります。平安時代では、調査範囲の南寄りにまとまって住居址が発見され、さらにその南では水場遺構が発見されました。居住・生活の場は南側にまとまって存在していたようです。古墳時代後期・前期の住居址も平安時代と同じ地区で発見されました。一方北側の調査区からは、古墳時代前期の遺物と共に、自然化学分析の結果、耕作痕の可能性のある遺構が発見されました。



▲ 第5号竪穴住居址 カマド



▲ 第5号竪穴住居址 カマド遺物出土状況